

絵本制作（案）

筑波大学情報科学類2年 江畑 拓哉（201611350）

1
扉

ある年の暮れ、旅人は森の中で休む場所を探していた。
森の中で寝るにしても、少なからず開けた場所が良かった。

2
一頁

珍しいこともあり、歩いていった先には大きな焚き火を囲んだ十二人の杖を持ったフードがいた。
さらに不思議なことに、そのフードの色はなぜか全員が違っていた。

3
二頁

ここに加わってもいいか、と近くの一人に尋ねた。
構わないとの返事。

横に座ろうとすると、

この十二の月をどう思う？
唐突に尋ねられた。

そのフードは杖を焚き火にかざした。炎は泡立ちその中から情景が浮かんだ。

4
三頁

十二月は雪と寒さの月、小雪を眺めて別れを告げ始まりを待つ月。ふと開けた空は澄んだ冷たさで素肌に鋭利な境界を刻んだ。

5 四頁

十一月は木枯らし吹く中、冬の始まりに備える月。足元には霜の碎ける小気味良い音、空には澄んだ青。

6 五頁

十月は収穫と赤の月。焼けるような赤黄の木々に刈り入れた穀物、充実の月。そして別れに悲しむ月。

7 六頁

九月は涼の月。暑さ過ぎた先の、休息の月。早朝の高く青い空に描かれる薄い白。

8 七頁

八月は暑さの残る白雲と蛍火の月。日の下では色彩のキャンパス、月の下では一面の星空。

9 八頁

七月は日の満ちる月。暑さの上り坂、朝夕の涼しさ。

10 九頁

六月は日の登る月。暑さが肌に触れてくる感覚。梅雨の淑やかさと萌黄の奔流。

11 十頁

五月は調和の月。早苗の上に降り散る花弁。水路を流れる若い清水。

12 十一頁

四月は咲き誇る月。とめどなく吹き出る命。物事の始まり。

13 十二頁

三月は発芽の月。未だに眠る者を揺する緩やかな一時。

14 十三頁

二月は残雪の月。浅眠の芽は嬉々として芽ぐみ始める。

15 十四頁

一月は眠りの中の始まりの月。物皆眠る床の外、小さく始まりを告げる。

16 十五頁

どれも素敵じゃないか

彼は答えた。

それに、明日過ごしやすければそれで良い

彼は礼を一つおいて、森を進んでいった。気がつけば夜は開けていた。